

## 平成17（2005）年度発展途上国研究奨励賞の表彰について

アジア経済研究所は、昭和38年以来、発展途上諸国の経済などの諸問題に関する優秀論文の表彰を行ってきた。昭和55年には、「発展途上国研究奨励賞」として、この領域における研究水準の向上に一層資することを目指して、その対象を社会科学およびその周辺の調査研究事業の著作全般に拡大した。表彰の対象は、前年の1月から12月までの1年間にわが国で一般に入手できる形で公刊された図書、雑誌論文、文献目録などで、発展途上国の経済、社会などの諸問題について研究し、また分析したものである。

平成17（2005）年度は各方面から推薦された49点を選考したが、最終選考で下記の作品が選ばれた。表彰式は7月1日に当研究所において行われた。

---

### 〈受賞作〉

『アフリカ農民の経済——組織原理の地域比較——』（世界思想社）

杉村 和彦（福井県立大学学術教養センター教授）

『フジモリ時代のペルー——救世主を求める人々、制度化しない政治——』（榊平凡社）

村上 勇介（国立民族学博物館地域研究企画交流センター助教授）

---

### 〈選考委員〉

委員長：中兼和津次（青山学院大学教授） 委員：遠藤健（朝日新聞社論説委員），  
寺西重郎（一橋大学教授），原洋之介（東京大学教授），藤田昌久（アジア経済研究所長）

### 〈最終選考対象作品〉

最終選考の対象となった作品は受賞作のほか、次の2作品であった。

朴 昌明著『韓国の企業社会と労使関係

——労使関係におけるデュアリズムの深化——』

（株）ミネルヴァ書房）

田原史起著『中国農村の権力構造——建国初期のエリート再編——』

（株）御茶の水書房）

杉村和彦『アフリカ農民の経済——組織原理の地域比較——』

はら よう の すけ  
原 洋 之 介

内戦の勃発によってその継続が困難になるといった苦勞を重ねた現地調査に基づく、アフリカ・ザイールの熱帯雨林での焼畑農耕とそこに生きる人々の社会生活に関する「地域比較を取り入れた」優れたモノグラフである。主として3章から10章に取り纏められたその調査報告は、アフリカの焼畑社会への過度の思い入れはない「冷静な分析」となっている。熱帯雨林地域での焼畑農耕を「混作」体系としてその生産力や農耕の持続性を解明したこと。社会の組織原理を、トアとよばれる複数世帯からなる「共食単位」という消費面での共同性から捉えたこと。以上2点が調査結果のポイントである。この農耕社会では、「人と土地の関係」は優越的ではなく、「人と人の関係」が優越的となっている。そこでは、土地の希少性がまだ意識されていないし、土地の私有制も発達していない。こういった事実も確認されている。

さらにアフリカ熱帯雨林焼畑社会にみられるこのような社会組織原理を、共同性が生産面と

消費面のいずれで制度化されるのか、またその縛りがタイトかルースかという2つの基準に基づいて、東南アジアの生産面でのルースな共同性と比較して、消費面でのややタイトな共同性が調査地の特徴であると結論づけられている。歴史のなかで生み出されたハビトゥスの違いが、この両地域の間で組織原理の違いを生み出してきたのではないのかというのが、本書での大きな仮説である。全体として、モンスーン東南アジアとの比較を明示的に取り入れ、かつ経済学と生態人類学との接合を試みた熱帯林アフリカの地域研究として十分に評価できる作品である。

アジア研究もアフリカ研究も今は、それぞれの地域だけの研究に閉じこもっていられる状況ではなく、地域間比較による地域研究の深化が急務となっている。本書の筆者杉村氏にそのような地域間比較での大きな仕事を期待するのは、ひとり評者だけではないであろう。

(東京大学教授)

## ●受賞のことば——杉村和彦

今日多くの学問が饒舌に語る、アフリカ農民の「貧困」「停滞」。しかしそれらは本当に疑うことができないのか。研究対象としたアフリカの農村で暮らしながら、それらを指標化するGNPや生産性という言葉が声高に語られるたびに、アフリカで出会った農民の中にあるひとつの「豊かさ」が、あまりにも遠くに追いやられるように思われ、どうしようもない苛立ちを感じた。その時、その「豊かさ」を語る言葉を持ち合わせていなかった。

ザイール（現コンゴ民主共和国）・キサングニ周辺の熱帯雨林下の焼畑の世界をはじめて見ながら、「混作」の世界の存在に驚いた。同じ小農世界といってもそこには他者を許容し、土地に縛られないリズムカルに生きる軽やかなもうひとつの「農」の世界があった。近代国家を支えたく農の論理とは根本的に異なる、「国家に抗する」アフリカ小農世界のエートスの中には、生産よりも消費の中に紡がれるような社会のあり方があり、そこに身を潜めると労働倫理にがんじがらめになったわれわれの「豊かさ」が根底から問われた。

本書において私は、こうした「体感」を一番大事にししながら、近代諸科学だけでなく、われわれの世界の農業伝統からも切り捨てられたアフリカの小農世界の位置をひとつの「学」として捉え返し、ひとつの言葉として、現代社会に向けて投げ返したいと思った。そして何はともあれ、アフリカ農村の「停滞ぶり」の背後に潜む、アフリカ農民の行動特性と生活の組織原理のユニークネスを主題化し、それを地域比較の視点から、浮き彫りにしようとした。

今回の受賞が、こうした私の試みに対して、後ろから背中を押してくれ、もう少しそのまま歩いてみたらと言ってくれているのだとしたら大変ありがたいし、勇気を与えてくれる。完成までに思いがけない時間がかかったが、その拙い試みに対して、発展途上国研究という予期せ

ぬ広大な領野の中でひとつの市民権をいただいたことを励みとし、少しでも研究が深まるようこれからも微力を尽くしたいと思う。

### 略歴

- 1958年 生まれ
- 1981年 京都大学文学部卒業
- 1991年 京都大学農学研究科博士課程単位取得退学
- 2003年 京都大学博士（農学）
- 1996年 福井県立大学経済学部助教授
- 2002年 福井県立大学学術教養センター助教授
- 2003年 福井県立大学学術教養センター教授、現在に至る。

### 主要著作

#### 著書

- （共著）『『共食』に生きる理性』『文化の地平線——人類学からの挑戦——』世界思想社 1994年、496-511ページ。
- （共著）『作物の多様化にみる土着思考』『講座 地球に生きる第4巻』雄山閣 1995年、165-190ページ。
- （共著）『ザイール川世界』『新書アフリカ史』講談社 1997年、63-91ページ。
- （共著）『『混作』の構想力』『持続的農村・農業の展望』大明堂 2003年。
- （単著）『アフリカ農民の経済——組織原理の地域比較——』世界思想社 2004年。

#### 論文

- 『『混作』をめぐる熱帯焼畑農耕民の価値体系』『アフリカ研究』第31号、1987年、1-24ページ。
- 『富者と貧者——そのクムの形態——』『アフリカ研究』第49号、1996年、1-24ページ。
- 『アフリカ小農論争のバースペクティブ』『福井県立大学論集』20号、2002年、21-38ページ。
- “Kibarua and Peasant Economy: A Case of Sagara Community of Morogoro, Tanzania.” *Journal of Fukui Prefectural University* No.24, July, 2004.

村上勇介『フジモリ時代のペルー——救世主を求める人々、制度化しない政治——』

なか がね      か    つ    し  
中 兼      和 津 次

本書は、フジモリ政権の誕生から終幕に至る約10年間の激動の時代を、数多くの文献やインタビューの記録に基づいて跡づけたものである。ペルーの大使館に長らく専門調査員として滞在し、身近にペルー政治を観察したものの目から見た冷静で、しかも生き生きとした筆致は読者に深い感動を与えている。しかも、単なるルポルタージュではなく、ペルーにおける政治文化を透徹した目で分析している優れた現代史的研究の成果でもある。

著者は、ペルーにおいてなぜフジモリのような権威主義的政治スタイルが幅をきかせるのか、あるいはひとりフジモリに限らずこれまでも幅をきかせてきたのか、その原因を原子化した人々と制度化できない政治制度に求めているが、これは単にペルーにとどまらず、他の多くの途上国にも大なり小なり当てはまることだろう。フジモリを肯定するか否定するかの「友敵論」から離れ、民主主義的な政治の制度化という観点から一貫した分析をしていることも高く評価

されよう。ただ、ペルー政治の「原理」たるパトロン・クライアント関係とそれに伴う利益分配の権力闘争という図式がはたして克服できるのかどうか、あるいは、なかなか根付かない制度化された民主主義はどのようにすれば構築できるのか、その答えが簡単に見つからないところに、ある種のもどかしさを感じないわけではない。しかし、これは筆者が「終章」で述べているように、他のラテンアメリカ諸国との比較研究を積み重ねることによって徐々に解明できることなのかもしれない。

本書にはアメリカ流の政治学でよく用いられる分析枠組みや分析手法に欠けるものがあり、もし本書を純粹に政治学の本として読むとき、やや物足りなさを感じるかも知れない。しかし、生きた政治現象を克明に叙述した記録として、あるいは南米政治の展開を知る欠かせない参考書として、本書は政治学者やラ米現代史の研究者に広く活用されるものと信じる。

(青山学院大学教授)

## ●受賞のことば——村上勇介

この度は伝統かつ荣誉ある賞を賜り、身に余る光栄に存じます。選考委員の諸先生をはじめ関係者の皆様に篤くお礼を申し上げます。

本書は、既存研究に対し感じた2つの疑問が出発点となっています。第1は、政治の短期的な動向に振り回される議論に終始していいのか、という疑問です。一例ですが、フジモリによる1992年の憲法停止措置までは、非民主的な政党などペルー政治の歴史的、構造的な問題を指摘していた、ペルーやアメリカ合衆国の少なからぬ研究者が、同措置の後、フジモリの権威主義的な性格を中心に批判するようになりました。反フジモリの立場からペルーでの政治闘争に何らかの形で関与しているため仕方なかったとは言え、研究者の姿勢としては一貫性に欠けるのではないかと思いました。私は、制度の視点から中長期的な特徴や傾向を考えることで、可能な限り研究に一貫性を持たせようと思いました。

第2は、現地の様子や事情を十分に把握しようとする姿勢に乏しい研究が結構多いのではないか、という疑問です。ある理論の論証のため、対象全体の一部を切り取ってこと足れりとする、アメリカ合衆国の研究で時々見られる場合の他、日本でも、例えば、大使公邸人質事件の際に、自らの主張を提示する材料として、この事件の断片を使う議論が多く見られました。本書では、既存研究や聞き取り調査の批判的検証を基礎に、できるだけ全体像を把握しようと努めました。

本書に結実した研究を通じ、ペルーやアメリカ合衆国でのものとは異なった、独自の研究を展開する可能性が見えたようにも思います。しかし、現実には奥深く、本書の分析についても、不十分な点や不明な点が多々あります。他方、比較研究を行い、本書で提示した分析枠組を洗

練する必要があります。そうしたことを土台に、理論的な切り込みを試みる課題も残されています。微塵も予期しなかった今回の受賞を励みに、今後、果敢に挑戦する所存です。

### 略歴

- 1964年生まれ
- 1986年 東京外国語大学外国語学部スペイン語学科卒業
- 1991年 筑波大学大学院地域研究研究科修了(国際学修士)
- 1991～1995年 在ペルー日本国大使館専門調査員・理事官
- 1995年 国立民族学博物館地域研究企画交流センター助手。
- 2003年 同センター助教授、現在に至る。

### 主要著作

#### 著書

*Sueños distintos en un mismo lecho: una historia de desencuentros en las relaciones Perú-Japón durante la década de Fujimori.* Ideología y política 20, Lima: Instituto de Estudios Peruanos y The Japan Center for Area Studies, 2004.

『フジモリ時代のペルー——救世主を求める人々、制度化しない政治——』平凡社 2004年。

#### 論文

- 「ペルーの下層の人々にとって民主主義の持つ意味——リマにおける調査研究からの一考察——」『国際政治』第131号 2002年 80-95ページ。
- 「ペルーの政党を分析する視角をめぐって」遅野井茂雄・村上勇介編『現代ペルーの社会変動』人間文化研究機構国立民族学博物館地域研究企画交流センター 2005年 183-202ページ。